OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	老年期における時間の意識
Author(s)	大橋, 明
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1997, 2, p. 43-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7298
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

老年期における時間の意識

大　橋　　明

1．はじめに

人はいつも心の中に時間と関連する思いを抱いている。期待、希望、絶望、楽観や悲観は未来に向けた意識が存在するゆえに現在の自分にもたらされる。追想、回想は過去に向けられた意識であると言える。また「セピア色の‥‥」という表現があるが、現在の自分に懐かしさをもたらす過去に向けた意識であろう。それらの意識を抱きながら、人は現在に生きている。すなわち人は時間を持ち、時間の中で生きている。人は時間とともに存在していると言ってもいいであろう。

ところで、老年期の人の心理的特性として、忘れっぽい、イライラしやすい、自己中心的、愚痴っぽい、古い習慣に固執する、昔のことを話したがる等が挙げられる。これらは老人に対するステレオタイプ的な評価かもしれないが、身近に老年期の人がいる場合、「昔のことを話したがる」ことを目の当たりにするのではないだろうか。老年期に至った人には、過去は長くある反面、未来はもはや僅かしかない。自ずから過去を振り返ることが多くなるであろう。

また、未来が短いということは、死が目前に控えていることを意味する。誰も知らない未知の世界であり自分の消滅を意味するものでもある死が近づくとなれば、不安に脅かされることとなる。しかし生きがいや目標等希望を持つ老人は、未来に対してあまり恐れを抱くことなく現在を生きるであろう。すなわち、老年期において、過去・現在・未来という時間に対する意識は非常に大きな意味を持っていると考えられる。

本論ではまず時間に関する理論を概観し、次いで老年期における時間に対する意識の従来の研究について整理したい。

2．時間に関する諸理論

（1）時間的展望

最初に心理学の体系に時間性の問題を取り上げたのはLewin,K.であると考えられており（日高・吉田，1979）、時間的展望（time perspective）と呼ばれる。時間的展望とは、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来および心理学的過去の見解の総体」（Lewin，1951）を意味する。広義には、個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関連づけたり、意味づけたりする意識的な働きで、一般的には、人生にかかわるような長期的な時間的広がりのある場合を示す（白井，1996）。

この時間的展望の概念はもともとFrank,L.K.が創出したものとされている（Wallace & Rabin，1960；Lewin，1942）。Frank（1939）は、文化的に決定された時間性（temporality）に関する態度が、そして過去と未来の間の力動的な相互作用が現在の人間の行動に影響を及ぼすとした。これを踏まえてLewin(1942）は、個人の生活空間を個人が現在の状況と考えているものに限らないものとし、未来や過去、そして現在もその中に包含され

ていることを指摘した。更に個人のモラールを引き合いに出して、それが個人の全時間的展望に依存していることを示唆した。すなわち、時間的展望をLewinの言うところの場の理論における生活空間を構築する要素のひとつと捉え、生活空間には個人の時間全体が含まれ、そして個人の時間的展望とモラールには関連があることを示している。

時間的展望には3種類の機能的要素があるとされる。白井（1996）によると個人の行動や心理は、現在の刺激によって規定されながらも、時間的展望を持つことによって行動や精神の自由を獲得することができる「状況による非規定性からの自由」、時間的展望の獲得によって将来の不安や過去からのとらわれから自由になることができる「将来の不安や過去のとらわれからの自由」、時間的展望の獲得によって、現在の生きる意味や生き方の捉え直しができる「現在の意味の捉え直し」を挙げている。時間的展望を持つことで、過去・現在・未来とのかかわりを通じて時間に束縛されず自分の生きる意味を洞察することができる、すなわち自分の存在の確認を可能にするのである。

時間的展望に関する研究は、たとえば非行少年（Barndt & Johnson, 1955；勝俣ら, 1982；大橋・鈴木, 1988）、精神分裂病患者（勝俣, 1974）、アルコール依存症患者（Roos & Albers, 1965）、不安感（Cottle, 1969, 1971）、達成動機（Murrell & Mingrone, 1994）等多種多様である。

ところで、時間的展望の概念は「個人の未来事象に関する時間的調節と順序化」と未来の時間だけを捉えたり（Wallace, 1956）、時間的展望と時間的指向性（time orientation）を同等のものとして扱ったりと、研究者によって不統一がみられることは否めない。

この点に疑問が呈され（Kastenbaum, 1961, 1965；勝俣・上田, 1973；都築, 1982）、白井（1994）は時間的展望の概念の整理を試みている。白井（1994）によると、時間的展望は①狭義の時間的展望、②時間的態度、③時間的指向性、④狭義の時間知覚、の4種類に分類される。

第一に狭義の時間的展望は、過去・現在・未来が事象によって分節化されるものと捉えたときの、その事象の広がりや数、相互の関係を示すものである。サブカテゴリーとして、過去か未来のどちらかにおいて関心の向けられている時制の長さを示す「広がり」、ある期間における目標や関心事の数で示される「密度」、目標や関心事の論理的一貫性の程度を示す「構造化」、目標や関心事の現実的な到達の程度を示す「現実性」、そして過去・現在・未来における関心事と関連するものとしての行動と思考における優勢な選択的方向性を示す「優勢性」の5点が提示されている。

次に第二の時間的態度は、過去・現在・未来に対する感情的評価であり、すなわち過去や現在、未来における事象に対して肯定的・否定的な評価を示すものである。

第三の時間的指向性は、過去・現在・未来の重要性が意識的に順序づけられた関心の方向性を示す。すなわち、過去・現在・未来のうちでどれが自分にとって最も大切なものと感じるか、その順序を示すものであると考えられる。

そして第四の狭義の時間知覚は、時間の流れる速さやその方向性、連続性に関する評価や判断であり、専念、焦り、時間的展望の混乱や拡散、時間不安など時間体験も含まれる。

（2）時間と自己像

自我の側面から時間体験を考察したのは北村晴朗である。北村（1957）は行動や意識の

主体である自我を「主体としての自我」と「客体としての自己」とに分類して考える必要性を説いた。

「主体としての自我」は、個人の行動や心的事象において、本人がその主体として感知するものと、個人の行動や心的事象の主体、担い手として、他の人々によって想定または仮定されたものとの2種類によって構成される。それに対して「客体としての自己」は、主体としての自我が自分と同一視しているものである。James(1890) やJersild(1960)、北村 (1978) が客体としての自己として主要な構成要素をそれぞれ示しているように、その覚知(awareness) の形式において多様であり (小山田, 1971)、またその内容も人それぞれかつ広範囲にわたるものと言える。

ところで、いわゆる自己像とは自分がこういうものだとして人が心の中に抱いている全体像 (北村, 1977) である。言い換えれば、客体としての自己を包括する全体像なのであるが、主観的に作られたものであり、身体や宗教的信仰、才能や性格など客体としての自己のどれが重要で中心的なものであるかは、その人によって、またその人の環境によって異なるとされる (北村, 1977)。すなわち、老人は過去に固執すると言われる。この場合、その人の自己像は過去に依存したものとなることが予想される。また、定年退職したばかりの人では、これからの生活設計に思いを巡らすであろうが、その人の自己像は未来における自己の身体や経済が特に中心となると推測される。

北村 (1977) によると、自己像を今現在の時点におけるものとしてみただけでは、その現象的特性や機能を十分に解明することができないとし、いわゆる自己像は、主体としての自我が現在の時点において自分自身の姿として認めるものであるにしても、その真の姿を明らかにするためにはより広範囲に捉えなければならないことを指摘した。すなわち、主体としての自我が過去において自己として捉えたもの、将来における自己と認めようとするもの、更には理想の自己像とするもの等を併せて考慮しなければならないことを述べている。

まず過去の自己像であるが、これには過去の特定の時点においてその当時の主体としての自我が自分の姿として認めていた自己像と、現在の主体としての自我が過去の特定の時点における自己の姿と見なしている自己像との2種類があると指摘している。

このうち心理学上重要な意義をもつのは後者であるとされる。過去の自己像は自己の経験から得たものを中心に形成されるわけであるが、今までの過去をすべて浮き立たせたものではなく、中には素地化されてしまうものもある。言い換えれば自分が経験した過去が選択されるのである。

たとえば、過去において配偶者の過ちを許せず離婚し、当時はれぼれとした思いを経験した人が、その後老人ホームに入居し、同室者が配偶者と仲睦まじく会話するのを見れば、過去の離婚のことを思い出し「何故許せなかったのか」等淋しく悲しく思うであろう。つまり、自分の過去として選択されるのは、その経験の当時において本人にとって強烈な印象を与えたものであるとともに、本人の現在の状況に関わり深いものであるし、現在における主体としての自我によって変容される過去の経験の意味は、その経験に対して以前抱いていた意味とは異なるのであり、従って意味づけや価値属性が変われば、それに応じてその過去の経験的事実が、現在の行動に及ぼす影響も変わる (北村, 1977) と考えられる。

次に、未来の自己像とは現在の主体としての自己像が未来において、実現するに違いな

い、現在のところそうなるとしか思えないと考えられる自己の姿とされる。北村（1977）は、第一に未来にはこうなってほしい、そうなることが理想であるという未来の理想像や願望像、第二に実現の可能性が希少であるにもかかわらず未来の姿として描く空想的自己像、そして第三に自分の運命として考えられる運命的自己像を挙げている。健康に自信のない老人が10年後の自分の寝たきりの姿を想像し不安を感じたり、健康であって欲しいと思うことがこれにあたる。

梶田（1988）は、自己像を自分自身についての意識や記憶、感情や価値づけ等からなる構造的ゲシュタルトとして捉え、主要な要素として他者に見られているものとして想定される自己像や過去の自己像、自分の可能性や未来の自己像などといった多面的な数多くのイメージが、現実の自己像との間でダイナミックな相互関連をもつことで、新たな現実自己が形成されたり、新たな行動への意欲が生じる、としている。すなわち杉山（1996）が指摘するように、過去の自己像や未来の自己像の認知は、自己像の一部として動機づけや感情と深い関連をもち、現在の自己像の認知にも関わっていると言える。

3．老年期における時間意識の研究

老年期において、時間の意識はどのような要因と関連しているのであろうか。また過去・現在・未来はどのように認識されているのだろうか。

老人は「過去に生きる」者と表現されることが多々あり、またそれが一般的な老人観として認識されている。すなわち、時間的展望や時間的指向性の中心が未来よりも過去にあることを意味している。ほとんどの人はある程度未来について考える（Kastenbaum, 1963；Hooker, 1992）と思われるが、老年期では過去と未来の時間的展望が減少するという報告（Kornfeld & Marchall, 1987）もあれば、Eson & Greenfield（1962）のように未来と過去両方の時間的展望が増加するとの報告もあり、時間に関する意識の研究の結果には一貫性がみられないことが指摘される。

（1）個人要因

個人要因の視点から従来の研究を概観すると、まずLehr（1967）は、将来への態度について60～65歳と70～75歳の老人で面接により調査し比較した。男性では年齢差はみられなかったが、女性では加齢と共に否定的であった。また、未来について肯定的な態度を持っている者ほど適応的であり、かつ現在の役割状況に関する満足度も高かったことを報告している。

文章完成テストで65歳以上の居宅老人における性差の検討を行った下仲・村瀬（1976）によると、女性老人は男性老人と比べて現在と過去の自己像において加齢と共に肯定的反応が減少した。また、女性老人は自分の未来についてかなり曖昧な見方が強く、未来の具体的な生活設計の内容でも積極的に自己を向上させる構えは少なくなり、趣味に自己を見出すという内的世界志向となっていることを示唆した。

五十嵐（1996）は、139名の老人に文章完成テストを実施し、同一性地位によって時間的展望が異なるかどうか検討した。その結果、同一性達成群は自己の変化についての記述が目立ち、同時に現実的で客観的な視点も併せ持ち、権威受容群では消極的記述がなされ、改めて自分の人生を取り戻したいという意識がみられた。モラトリアム群は同一性達成群

と大きな違いがみられず、将来へ積極性と自己反省的な記述があった。同一性混乱群では状況や役割の記述が特徴的で、他者との関係を強く意識した記述がみられた。

63～92歳の女性老人78人に対して人生描写法（life drawing）を実施したWhitbourne & Powers（1994）は、より肯定的な適応をした女性老人は外的統制を維持し、未来指向であり、家族とつなげて自分について記述していた。また、自分の生涯について肯定的に記述した女性老人は、やはり家族とつなげて自分について記述していた。

このように個人要因、特に性差という観点から研究結果をみてみると、女性は男性に比べて各時制に対して概して否定的態度をもつ傾向にあることが窺われる。また未来指向がよりよい適応と関連していることが推測される。最近では、統制の所在（locus of control）や同一性の視点からの研究も行われているが、他の個人要因についても検討する必要があるように思われる。

（2）環境要因

施設居住という環境の差が時間の意識にどのような影響を与えているかについても研究が行われている。下仲・村瀬（1975）は、女性ばかり60歳以上の居宅老人と施設老人を対象に文章完成テストを実施し、環境と加齢による自己像の相違について検討している。その結果、居宅老人は過去の自己像および現在の自己像の両方で肯定的見解をもっていると同時に自己に対する内省も充分に有していることを紹介している。施設老人では、現在の自己像の認識が曖昧で現実の自己を直視することを避けているところがみられ、特に高齢老人では自分の未来に対する消極的な姿勢が強く示されていることを報告している。

Moriya（1978）は60～89歳の老人 319人に質問紙調査を行い、加齢に伴い、生への固執と人生への要求のなさという相対する傾向がみられたことを述べている。また、老人ホームに在住する者は在宅者よりも、死後の生命について信じているとした。

環境要因、特に居宅と施設居住という観点で概観するならば、居宅老人の場合は施設老人よりも各時制に対して肯定的傾向にあることが窺われる。また、施設老人が未来に対して消極的であり、死後について意識している点は興味深い。老人ホーム等の施設という刺激の薄い閉鎖的な環境が各時制への意識の低下、すなわち傍観的状態をもたらしていることが考えられるが、検討が必要であると思われる。

（3）加齢による相違

加齢という観点からの従来の研究をみてみると、Bortner & Hultsch（1972）は、現在から過去への広がりを示し、過去に対する評価から現在に対する評価を引いたものを回顧的傾向（retrotension）、現在から未来への広がりであり、未来に対する評価から現在に対する評価を引いたものを期待的傾向（protension）と定義した上で、20～88歳の1409名に自己投錨尺度（Self-Anchoring Scale）を実施した。その結果、20歳代後半において両傾向にそのピークが来ており、加齢とともに曲線減少を示した。50歳代では、自分が進歩してきたこと、これからも進歩するであろうことを考えているが、60歳代で、過去・現在・未来は等しく評価された。70歳代では、過去は現在よりも、現在は未来よりもそれぞれ満足なものとして評定されたことを報告している。

続いてHultsch & Bortner（1974）は、1972年と1973年にわたって1247名に対しタイム・

シーケンシャル法を施行した。その結果は先述したBortner & Hultsch（1972）のそれと同様であり、青年期は未来指向であり、加齢とともに期待的傾向と回顧的傾向が同程度に評価され、老年期には過去指向となるという結果は、社会文化的変化（世代差）によるものというよりも年齢差（コホート差）によるものであることを強調している。

17～92歳の男女1100人以上にImaginal Processes Inventoryを実施して過去・現在・未来に関する空想(daydreaming）の頻度を調査したGiambra（1977）によると、過去の空想頻度と年齢との間に相関はみられなかったことを報告している。しかし、過去の空想頻度から現在のそれを引いた差をみると、30～64歳では現在の方が多く、その他の時期では概して過去の方が多いこと、また同様に過去と未来の空想頻度の差をみた場合、若者では未来の方が多く加齢に伴い過去が増加し、女性老人では特に過去の空想量が多いことを指摘している。Kimmel（1990）はこの結果を、過去に関する思考が老人の空想の多くを占めているのではなく、加齢に伴い過去の空想量が現在の空想量に等しくなってくるものとして解釈している。

中里・下仲（1985）は、過去・現在・未来の時間的展望の広がりと評価、時間の圧迫感等について、施設に居住する女性老人73名と女子学生 103名を対象に質問紙調査を行った。その結果、時間的展望の広がりは、老人では過去が大きく、女子学生では未来と現在が大きかった。時間に対する評価では、女子学生が過去と未来に関して老人より肯定的に評価するのに対して、老人は現在に関して肯定的であった。時間の圧迫感については、女子学生の方が老人よりも強く感じていた。

イスラエル在住の青年期から老年期の4342人に対して自己投錨尺度を実施したShmotkin（1991）によると、過去の評価は31～40歳で最低となり中年期や老年期でやや増加し、また現在および未来の評価は加齢に伴い減少した。Shmotkinは同時に時間的展望と生活満足度との関連性について吟味し、生活満足度はどの年代でも現在と強く関連していた。過去や未来との関連については、青年期や中年期において生活満足度は過去よりも未来と強く関連していたが、老年期では過去との関連が未来とのそれよりも強く、また他の年代と比較すると老年期では関連の強さが大きかった。すなわち老年期において、生活満足度は現在との関連を中心に、過去および未来とも強く関連していることを示しており、また時間的展望が生活満足を暗示するものとして捉えられ得ることを示唆している。

20～37歳の若者と60～81歳の老人を対象に質問紙調査を実施したFingerman & Perlmutter（1995）は、未来の時間的展望における加齢差と、未来の時間的展望、統制の位置、過去と予想される未来のライフ・イベント（life events）との関連性を検討している。その結果、若者も老人も2～3か月先のことを最もよく考えていたが、老人は概して遠い未来よりもより近い未来のことを頻繁に考えており、最近経験した出来事の報告数が多い人および肯定的に捉えている人は、より遠い未来を展望していることを報告している。また、定年退職や身体的健康といった人生における不連続（discontinuous）な出来事を考える人では、より遠い未来の時期に関する思考が多くみられていた。すなわち、人生における波乱を伴う出来事を考える人では遠い未来を展望し、また個人の生活を構成する出来事やそれに対する態度によって時間に対する感覚が変化することを示唆している。

（4）未来展望の失敗の意味

調査において未来に関する項目に対し無反応あるいは反応の失敗がみられることが多いが、それは心理的幸福感の不足、抑うつ気分、自殺念慮等の適応の指標と関連しているという報告がある（Seligman, 1975 ; Hill et al., 1988)。すなわち、未来の時間的展望や未来に対する希望を持つことは、健康的な人を暗示するものとして捉えられている。老年期においても未来に関する質問項目に対する無反応や反応拒否の傾向がみられるが、Shmotkin（1991）はその理由として、未来に対する不安を挙げている。それに対してStaatsら（1993）は、複雑な質問の時、質問紙の項目の字が小さ過ぎる時、難解な認知作業を行う時に無反応の傾向が出現するとしている。

以上の結果から、老人は未来に関心がなく、過去に生きるとは言えないと考えられる。Cumming & Henry（1961）は、加齢に伴い生活空間が縮小し、興味や関心は次第に狭められるという自我の減弱について言及しているが、あくまでも興味や関心は狭められるのであって消失してしまうのではない。過去を振り返ることが顕著となっても、将来に対する興味、関心、希望そのものがなくなってしまうものではないのである。そしてそこには、個人要因、環境要因が深く関連していることが推測される。

Kastenbaum（1987）は事例研究から老年期における未来性の欠如や過去への没頭は正常ではないとしているが、白井（1994）も、老人も将来に関心を持ち、過去に没頭するのでもない者が適応的であるとし、将来への関心の持ち方や回想の意義に他の年齢との違いがあることを指摘している。更に白井（1994）は、老人が未来に対する関心が減少することを認めているが、老人が未来の危機より現在の関係の安定を求めていること、また過去は個人の満足を引き出すために利用されることをその理由として挙げている。

ところで、従来の研究の結果は一貫性に欠けることは先述した。その理由として、状況要因と個人要因を混同して解釈していることが指摘されている（白井，1994)。白井(1994）は、青年期と老年期の比較の場合、青年期においては心理機能の発達がみられるが、老年期では老化が伴うという例を挙げ、年齢差は状況要因も個人要因も異なる個人の比較であったことが一貫性の欠落に繋がっていることを示唆している。このように要因の統制が曖昧であったことが指摘される。研究の方法や解釈についても今後更なる吟味が必要である。

4．今後の課題

Butler（1963）によって提唱された回想法（reminiscence・life review）は、老年期において顕著にみられる過去の振り返りを用いて、専門家が共感的受容的姿勢をもって意図的に介入することを通じて、高齢者の心理的安定や自我の統合を達成する方法である（黒川ら，1995)。すなわち過去を振り返ることを通じて、老人の交流を促し、経験を共有し、過去の出来事を再統合することによって、抑うつを軽減させたり、自己評価や生活満足度を高めたりすることができるのである（Haight & Burnside, 1993)。これは、老年期における過去の意識の重要性を示すものである。

また、Shmotkin（1991）やFingerman & Perlmutter（1995）の結果に示されるように、未来の意識によっても現在の行動が異なっており、老年期における未来の意識の重要

性も認められる。

Megargee & Price (1970) によると、非行少年が収容された施設での時間的展望は未来指向的であり、未来に焦点を当てたカウンセリングをする必要があることを指摘している。また、時間的展望に直接焦点を当てたものではないが、柏木 (1994) もターミナルケアでの事例を取り上げ、末期ガンである妻のレントゲン写真を見ておきながら異常に気づかず自責の念にとらわれていたレントゲン技師のケアにおいて、スタッフが過去・現在・未来という時制を念頭に置きながら患者の問題を考える必要性を説いている。これらは共に、過去や未来についての意識を変容させることで現在に適応した行動を導こうとするものである。つまり、時間的展望等に代表される時間の意識の問題は、現在における人の行動を理解するうえで重要な概念である (都築, 1982) と考えられる。

しかし時間の意識とは、単に現在から誕生までの過去、現在から死までの未来という漠然とした時間を指し示すものではないように推測される。時間的展望にせよ各時制における自己像にせよ、あるライフ・イベントを回想あるいは予想した上で構成されるものであるように考えられる。たとえば「私にとって、過去とは辛く苦しいものであった」という意識は、幼き頃に両親と死別したこと、大病を患ったこと、子育て等過去の強烈な印象を伴うライフ・イベントがあってこそ出現するものと思われる。また、配偶者の喪失、痴呆出現、自分の死という未来に起こると予想される自分にとって重要なライフ・イベントが未来に対する不安や葛藤を生起させていることが考えられるのである。

田口・小山田 (1997) は、現在における老人が過ごした青年期や成人期には戦争体験というライフ・イベントがあり、この戦争の時期や苦しく辛い体験をした時期の回想が多くみられたことを指摘している。また時系列を追った個人回想法を実施した結果、過去を「養女にやられ学校に行かせて貰えなかった、離婚しなかったらこんな苦労はしなかった」と捉えていた協調性の薄い対象者が「養母は私のことを思ってお茶やお華を習わせてくれた」等と自己と他者を受容し、葛藤を解決したことを報告している。この場合、自分が養女となったことや離婚したこと等本人にとっては強烈であったライフ・イベントによって、過去を否定的なものとして感じてしまっていたことが現在における協調性のなさに繋がっていたことが窺われる。

中年期以降老年期にわたって生じるライフ・イベントは、更年期障害、定年退職に始まり配偶者の喪失、疾病、孫の誕生、一人暮らし、施設への入居等が挙げられるが、それぞれ葛藤を伴うものと推測される。今後は、過去・現在・未来におけるライフ・イベントをどのように考え如何に乗り越えていくかという観点から時間の意識を捉える研究も必要であるように思われる。

引用文献

- Barndt, R., & Johnson, D. M. 1955 Time Orientation in Delinquents. Journal of Abnormal and Social Psychology, 51, 343-345.
- Butler, R. N. 1963 The Life Review ; An Interpretation of Reminiscence in the Aged. Psychiatry, 26, 65-76.
- Bortner, R. W., & Hultsch, D. F. 1972 Personal Time Perspective in Adulthood. Developmental Psychology, 7, 98-103.

・Cottle, T. J. 1969 Temporal Correlates of the Achievement Value and Manifest Anxiety. Journal of Counseling and Clinical Psychology, 33, 541-550.
・Cottle, T. J. 1971 Temporal Correlates of Dogmatism. Journal of Counseling and Clinical Psychology, 36, 70-81.
・Cumming, E., & Henry, W. E. 1961 Growing Old. Basic Books, New York.
・Eson, M. E., & Greenfield, N. 1962 Life Space : It's Content and Temporal Dimensions. The Journal of Genetic Psychology, 100, 113-128.
・Fingerman, K. L., & Perlmutter, M. 1995 Future Time Perspective and Life Events Across Adulthood. The Journal of General Psychology, 122, 95-111.
・Frank, L. K. 1939 Time Perspectives. Journal of Philosophy, 4, 293-312. (Wallace, M., & Rabin, A. I. 1960 Temporal Experience. Psychological Bulletin, 57, 213-236. より引用)
・Haight, B. K., & Burnside, I. 1993 Reminiscence and Life Review : Explaining the Differences. Archives of Psychiatric Nursing, 7, 91-98.
・Hill, R. D., Gallagher, D., Thompson, L. W., & Ishida, T. 1988 Hopelessness as a Measure of Suicidal Intent in the Depressed Elderly. Psychology and Aging, 3, 230-232.
・日高三喜夫・吉田昭久　1979　Time Perspective と Personality の関連－問題提起－茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術），28，139-158.
・Hooker, K. 1992 Possible Selves and Perceived Health in Older Adults and College Students. Journal of Gerontology : Psychological Sciences, 47, P85-95.
・Hultsch, D. F., & Bortner, R. W. 1974 Personal Time Perspective in Adulthood : A Time-Sequential Study. Developmental Psychology, 10, 835-837.
・五十嵐敦　1996　高齢者の人生展望とその評価　日本教育心理学会第38回総会発表論文集，52.
・Giambra, L. M. 1977 Daydreaming about the Past : The Time Setting of Spontaneous Thought Intrusions. The Gerontologist, 17, 35-38.
・James, W. 1890 The Principles of Psychology. Dover Publication, Inc, New York.
・Jersild, A. T. 1960 Child Psychology. 6 ed. Prentice-Hall.
・梶田叡一　1988　自己意識の心理学（第２版）　東京大学出版会
・柏木哲夫　1994　ターミナルケアと人間理解　その２－カウンセリングと時制－Molecular Medicine, 31, 3, 360-365.
・Kastenbaum, R. 1961 The Dimension of Future Time Perspective, An Experimental Analysis. The Journal of General Psychology, 65, 203-218.
・Kastenbaum, R. 1963 Cognitive and Personal Futurity in Later Life. Journal of Individual Psychology, 19, 216-222.
・Kastenbaum, R. 1965 The Direction of Time Perspective : . The Influence of Affective Set. The Journal of General Psychology, 73, 189-201.
・Kastenbaum, R. 1987 Past vursus Future Orientation in Psychotherapy for the Elderly. Psychotherapy in Private Practice, 5, 115-121.

・勝俣暎史・上田一博　1973　時間的展望テスト（ＴＰＴ）に関する研究（Ⅰ）－ＴＰＴの構想と適用例－　熊本大学教育学部紀要，人文科学，22，155-162.
・勝俣暎史　1974　時間的展望テスト（ＴＰＴ）に関する研究（Ⅱ）－破瓜型分裂病患者のＴＰＴ解釈例－　日本心理学会第38回大会発表論文集，478-479.
・勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり　1982　非行少年の時間的展望－少年鑑別所収容少年の場合－　熊本大学教育学部紀要，人文科学，31，267-277.
・Kimmel, D. C. 1990 Adulthood and Aging－An Interdisciplinary, Developmental View 3／edition－. John Wiley & Sons, Inc.（加藤義明（監訳）　1994　高齢化時代の心理学　ブレーン出版）
・北村晴朗　1957　自我　梅津八三・宮城音弥・相良守次・依田新（編）　心理学事典　平凡社
・北村晴朗　1977　新版自我の心理　誠信書房
・北村晴朗　1978　総説人間の心理　南窓社
・Kornfeld, A. D., & Marshall, P. E. 1987 SAT and TAT Scores as Measures of Time Perspective in Institutionalized and Community-based Senior Adults. International Journal of Psychosomatics, 34, 11-13.
・黒川由紀子・斎藤正彦・松田修　1995　老年期における精神療法の効果評価－回想法をめぐって－　老年精神医学雑誌，6，315-329.
・Lehr, U. 1967 Attitudes towards the Future in Old Age. Human Development, 10, 230-238.
・Lewin, K. 1942 Time perspective and morale. New York : Houghton Mifflin.（末永俊郎(訳)　1954　時間的展望とモラール　「社会的葛藤の解決」　東京創元社）
・Lewin, K. 1951 Field Theory in Social Science. New York : Harper.（猪股佐登留(訳)　1979　社会科学における場の理論［増補版］　誠信書房）
・Megargee, E. I., & Price, A. C. 1970 Time Orientation of Youthful Prison Inmates. Journal of Counseling Psychology, 17, 8-14.
・Murrell, A., & Mingrone, M. 1994 Correlates of Temporal Perspective. Perceptual and Motor Skills, 78, 1331-1334.
・Moriya, K. 1978 Older People's Attitudes towards the Future　老年心理学研究，4，37-43.
・中里克治・下仲順子　1985　老人の時間体験　老年心理学研究，8，9-21.
・大橋靖史・鈴木明人　1988　非行少年の時間的展望に関する研究　日本犯罪心理学会第26回大会発表論文集，4-5.
・小山田隆明　1971　セルフ・イメージの発達的研究（序報）　岐阜大学研究報告（人文科学），20，88-96.
・Roos, P., & Albers, R. 1965 Performance of Alcholics and Normanl on a Measurement of Temporal Orientation. Journal of Clinical Psychology, 21, 34-36.
・Seligman, M. E. P. 1975 Hopelessness : On Depression, Development, and Death. San Francisco : Freeman.

・下仲順子・村瀬孝雄　1975　ＳＣＴによる老人の自己概念の研究　教育心理学研究，23，36-45.
・下仲順子・村瀬孝雄　1976　加齢と性差よりみた老人の自己概念　教育心理学研究，24，20-30.
・白井利明　1994　時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題　大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門，42，187-216.
・白井利明　1996　時間的展望とは何か－概念と測定－　松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二（編著）　心理的時間－その広くて深いなぞ－　北大路書房
・Shmotkin, D. 1991 The Role of Time Orientation in Life Satisfaction Across the Life Span. Journal of Gerontology : Psychological Sciences, 46, P243-250.
・Staats, A., Partlo, C., & Stubbs, K. 1993 Future Time Perspective, Response Rates, and Older Persons : Another Chapter in the Story. Psychology and Aging, 8, 440-442.
・杉山成　1996　時間次元における自己像と自我同一性　松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二（編著）　心理的時間－その広くて深いなぞ－　北大路書房
・田口優子・小山田隆明　1997　高齢者の個人回想法に関する研究（Ⅰ）　岐阜大学教育学部研究報告（人文科学），45，77-89.
・都築学　1982　時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究，30，73-86.
・Wallace, M. 1956 Future Time Perspective in Schizophrenia. Journal of Abnormal and Social Psychology, 52, 240-245.
・Wallace, M., & Rabin, A. I. 1960 Temporal Experience. Psychological Bulletin, 57, 213-236.
・Whitbourne, S. K., & Powers, C. B. 1994 Older Women's Constructs of Their Lives : Quantitative and Qualitative Exploration. International Journal of Aging and Human Development, 38, 293-306.